

男性であることが男性養護教諭の仕事に対する意識と体験にどのように現れるのか

鈴木春花(東京学芸大学大学院教育学研究科養護教育専攻)

朝倉隆司(東京学芸大学養護教育講座)

はじめに

近年、ケア労働における男性従事者の割合増えているが、女性的職業とされるケア労働を男性が行うことへの本人と周囲の違和感が生じていることが指摘されており、男性従事者は困難な体験をしながら男性特有の意識の変化を経ていることが明らかになっている。男性養護教諭も男性特有の体験をし、自分の性別を意識しながら働いていると推測される。しかし、男性養護教諭がどのような意識を持って働いているのか、研究は行われていない。

本研究は、男性養護教諭の仕事に対する意識と体験について、自分の性別をどのように意識し仕事に取り組んでいるかを明らかにすること、他職種との比較を踏まえ男性養護教諭の特徴やその影響要因を検討することを目的とした。

方法

(1)調査対象

現職男性養護教諭4名を対象とした。年齢は20~30代、校種は男子校と特別支援学校であった。勤務形態は全員が男女複数配置であった。経験年数は10年未満が3名、10年以上20年未満が1名であった。

(2)データ収集方法

予めインタビューガイドを作成し、対象者1人につき1時間程度の半構造化インタビューを行った。主に「なぜ養護教諭を目指したのか」「養護教諭はどのような職業と考え、それを実現するためにどのようなことを大切に仕事しているか」「男性が養護教諭として働くことをどのように捉えているか」について語ってもらった。インタビュー内容は対象者の了解を得て、その場でメモ及び録音した。

(3)分析方法

録音から作成した逐語録を読み込み、「なぜ養護教諭を目指したのか」「養護教諭という職業をどう捉えているか」「どのような仕事上の体験をするのか」「本研究の対象者にはどのような特徴があるか」「男性養護教諭がいる意義をどう考えているか」の5つのテーマを立て、該当する語りを分析し、カテゴリーを作成した。

結果と考察

(1)なぜ養護教諭を目指したのか

【健康や体への興味】【特別な居場所づくりへの思い】【お世話になった養護教諭に対する憧れ】【養護教諭の多彩な役割の気づき】【男性でもなれるという思い】という5つのカテゴリーが作成された。

養護教諭を志望する段階では、今回の対象者全員が性別を意識せずに養護教諭という職業に興味を持ち、目指すようになっていた。その後も性別をほとんど意識することなく大学生活や実習を終えて働いている男性養護教諭もいれば、社会的認識及び実数が「養護教諭＝女性」とされる中で【男性でもなれるという思い】を持ちながら養護教諭を目指した男性養護教諭もいた。

(2)養護教諭という職業をどのように捉えているか

【専門的知識・技術を持つ】【子供に寄り添う】【周囲との連携が不可欠である】【仕事の範囲が曖昧である】【心身の健康管理を行う】【教育的役割も担う】【安心できる保健室をつくる】【専門性と性別は無関係である】という8つのカテゴリーが作成された。

今回の対象者は経験年数に関係なく専門性を強く意識して働いていた。働く中で「男性でも養護教諭として働ける」という手ごたえを感じ、教職員からも「男性の養護教諭でも良い」と認められている様子がうかがえた。

(3)どのような仕事上の体験をするのか

【赴任先の男性養護教諭に対するバリア】【少数派男性ゆえの孤独感と焦点化】【中年期の男性養護教諭イメージの不確定さに対する不安と希望】【子供が持つ羞恥心への理解】【セクハラ等の危険性の認知】【子どもとの関わり方についての気づき】という6つのカテゴリーが作成された。

男性看護師、男性保育士に関する先行研究では、「性別を理由に女性患者に看護ケアを断られる」「性別を理由に女性保育士に保育の仕方を批判される」のような男性特有の体験をしていることが明らかになっている。本研究のインタビューでは、例えば「女子児童生徒に対応を拒否された」「男性養護教諭について否定的な意見を言われた」のような体験は語られなかった。

【赴任先の男性養護教諭に対するバリア】や【セクハラ等の危険性の認知】など養護教諭に特徴的な体験もあった。このことから、男性看護師、男性保育士と同様に男性特有の仕事上の体験をするもののその質と内容は異なっており、このような違いが生じる要因として、看護師のような強い羞恥心の伴う仕事内容でないこと、保育士のような乳幼児を対象とした仕事ではなく育児や母親を連想しにくいこと、公立学校の場合異動が定期的にあること、思春期の児童生徒を対象としていることといった「養護教諭の仕事の特徴」が考えられた。

また、【中年期の男性養護教諭イメージの不確定さに対する不安と希望】という、男性看護師や男性保育士に比べてまだ少数派である男性養護教諭の課題もあった。

(4)今の職場で働いている理由をどう考えているか

【本人のポジティブな性格】【配慮することや助けを求めることを当たり前とする考え方】【周囲の肯定的な評価】【校内協力体制の確立】という4つのカテゴリーが作成された。

男性養護教諭に出会いともに働く中で、周囲が持つ男性養護教諭に対する理解が深まり、期待感が高い良好な関係性が構築されていることは、少数派男性ゆえの困難や課題なく養護教諭として勤務できる理由のひとつと考えられた。

(5)男性養護教諭がいる意義をどう考えているか

【子供に養護教諭の選択肢を与えることができる】【キャリア教育の一翼を担う】【これまでの当たり前を問い直すことができる】【多様なニーズへの対応ができる】という4つのカテゴリーが作成された。

存在意義について、男性養護教諭単体の意義ではなく、男女の養護教諭が複数配置で保健室にいることの意義が多く語られた。男性の視点が入ることの重要性は、女性比率の高い職業において述べられている。しかし、やはり歴史的社会的認識及び実数から見ても「養護教諭＝女性」とされ、女性養護教諭の働き方が当たり前とされている現状がある。男性養護教諭の登場によって男性の視点が入られることで、異性児童生徒に対する関わりや子供に養護教諭の選択肢を与えることについて、これまでの養護教諭のあり方を問い直すきっかけとなっていた。

まとめ

(1)男性であることが男性養護教諭の仕事に対する意識や体験にどのように現れるのか

本研究では、志望理由と職業観について性別は強く反映されていなかった。しかし、【男性でもなれるという思い】を持ち養護教諭を志す者や、【専門性と性別は無関係である】と考えながら働く者もいた。これらのカテゴリーでは、養護教諭の専門性と性別は無関係なく、男女とも養護教諭として働けると考えていることが語られた。これは、少数派男性が多数派に参入する場合に気づき意識であると考えられた。しかし、このような意識が男性養護教諭に特有なのか、女性養護教諭についても検討する必要がある。

仕事上の体験については、性別が強く反映されていた。どのカテゴリーも男性養護教諭が少数派であるからこそ意識し、体験するものと考えられた。その中には男性養護教諭にとっての課題も見られた。男性看護師、男性保育士の先行研究では、仕事をする中で男性ゆえの葛藤や不安を抱え、性別と職業適性について悩む様子が明らかになっている。だが、男性養護教諭の場合は、男性特有の体験をしているものの、他職種のように困難さを抱えているわけではなかった。

男性養護教諭の存在意義については、どのカテゴリーについても女性と男性の両視点の必要性が語られ、男女の養護教諭が保健室にいる意義が語られた。

(2)男性養護教諭が働く姿から言えること

本研究の対象者は、「男性でも養護教諭として働ける」「養護教諭の専門性と性別は無関係である」という自信を持ち、相方の女性養護教諭や教職員と連携しながら、養護教諭として問題なく勤務していた。一方で、社会的認識と実数は「養護教諭＝女性」であり、男性養護教諭に対する偏見や否定的な意見は存在しており、そういった現状を踏まえ「自分は運が良い」と語る場面もあった。だが、養護教諭の適性についてどこにも性別の規定は無い。つまり、本研究の対象者のように性別に関係なく自信を持ち生き生きと働けることは当然のことであり、性別と専門性を分けて働く姿は本来あるべき養護教諭の姿と言える。